

## 教室の風景

【教室には子どもたちのいろんな姿がある。子どもたちとの暮らしは、刺激の連続である】

「このごろ、私達の間で演歌ブームが巻き起こっています。ことの発端は私なのですが……。S子さんに『もしかしてPART2』と『津軽海峡冬景色』を教えてあげました。いつもS子さんは歌っています。でも、私はやっぱり『天城越え』がいいんですけど……。演歌は、このごろちょっと新鮮ほいです。」（Nさん）

「今日から私は『津軽海峡冬景色』を覚えよう！と決意した。S子やN絵やE美がとっても詳しいので、歌詞を聞いて、メロディーを聴いて、必死に覚えた。明日学校でメロディーの確認をしてみて、完璧にさせたい。あと、『もしかしてPART2』をS子がよく歌っている。私も少し覚えてみたい」。（A子さん）

二人の、生活記録帳を読んだ時、私は魂の震えるのを感じた。心の奥底から沸き上がる、ほとばしるような感動を覚えた。いよいよ、演歌の時代がやってくる。再び、演歌ブームが日本をおおうのだ。少し前は、流行の先端は女子高生といわれた。今は古い。今は時代の先端は女子中学生である。その女子中学生の間で「演歌ブーム」が起きようとしている。

演歌は日本人の心である。最近の日本人は、日本の心を失ってきていると言われる。これの解決方法は演歌しかない。確かに舶来の音楽にはそれなりの良さはある。わけの分からない最近の音楽が私は嫌いだが、否定はしない。何が許せないかというと、「演歌はダサイ」といって演歌を否定する若者と、若者に好かれようとして演歌を歌わないおじさんたちである。

嫌いだからといって、人の好きなものを否定する必要はない。若者のご機嫌をとるように、自分の心まで捨てようとするおじさんは、本物のおじさんではない。

そうだ、演歌は新鮮なのだ！ 3組の教室から演歌が響く日が近い！！！！